

CIEC 第 123 回研究会

テーマ：「コロナ禍における学びの継続」について

開催日：2020 年 11 月 22 日 14：00～16：15

会場：Zoom オンライン会議室

パネリスト：

①市立札幌旭丘高等学校 高瀬敏樹氏

②東京都立三鷹中等教育学校 能城茂雄氏

③早稲田大学高等学院 武沢護氏

司会・ファシリテータ：吉田賢史(CIEC 小中高部会・早稲田大学高等学院)

プログラム：

14：00 - 14：05 開会の挨拶

14：05 - 15：20 各パネリストより学校での立場や取り組みなどを具体的に紹介。

15：20 - 15：30 休憩

15：30 - 16：10 パネルディスカッション・質疑応答

16：10 - 16：15 閉会の挨拶

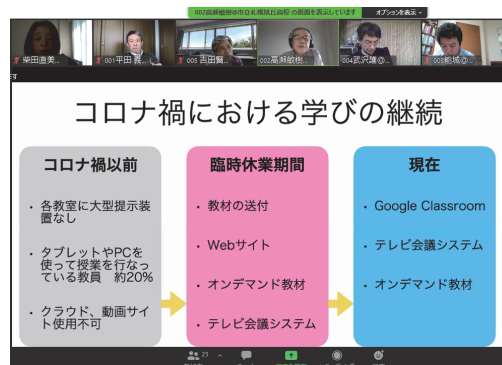
研究会概要：

新型コロナウイルスによる感染拡大が続く中、25 名の参加者のもと、Zoom を利用したオンラインにより第 123 回研究会が行われた。まず、小中高部会長平田義隆氏（京都女子高校）より、開催挨拶と趣旨説明があった。

前半は、3 名のパネリストにより各学校の取り組みについて紹介が行われた。

はじめに、高瀬敏樹氏より、コロナ禍以前の札幌市立学校における ICT 環境の整備状況の説明、臨時休業期間中「動画共有サイトの利用許可」「Zoom による SHR 開始」「Google Classroom のアカウント配布」が段階的に開始された様子が紹介された。動画プラットフォームとして vimeo を利用した経緯も紹介された。選定の理由として、広告が表示されない、特定のドメイン内のみでの限定公開、動画自体にパスワード設定可能等が挙げられた。また、授業動画を作成するにあたり先生方へ伝えたこととして、手持ちの機材で、どんなスタイルでもよい、編集不要、できるだけ短く（3 分～10 分間）と呼びかけ、結果として、多くの動画がアップロードされたことが報告された。さらに、vimeo の分析機能を利用した月別視聴時間のグラフなども紹介された。最後に、臨時休業期間後、ICT 環境として、「全生徒、教職員へ Google Classroom のアカウントを発行」「HR、全教科、総合的な探求の時間、生徒会活動、部局活動で活用」「zoom が市教委への申請なしで利用可能」「出席停止になった生徒へのリアルタイム授業配信」など、コロナ前に比較し進展した様子の報告があったが、多くの市立高校では、普通教室での大型提示装置や無線 LAN の整備の遅れなど ICT 環境の課題も多いことも指摘された。

続いて、能城茂雄氏より、コロナ禍以前の 2019 年度末までの 4 年間の「ICT パイロット校の指定」についての紹介があり、生徒 1 人 1 台が整っておりさらに生徒一人あたり、LTE 7GB が整備されており、全校生徒と教員で約 7TB の通信が可能（LTE が繋がらない事例なし）であること、無線(Wi-Fi)は、プロジェクターとの接続のみとの環境であったことが紹介された。4 月の臨時休校の期間に関しては、主に新入生への対応が紹介された。Classi の ID 郵送、Zoom 利用に向けて校内研修、Zoom・Skype による HR の早い段階で



の実施、さらには、5月11日より、Zoom 利用による通常時間割でのリアルタイム遠隔授業を実施(生徒は制服で参加、体育は体操着着用)など紹介された。この間大切にしていたことは、・生徒とのつながり、登校できない状況でも生徒と顔の見える関係を継続していたことで、それを支えていたのは、「学校としての組織対応(全教職員の協力)」「ブレない対応(オンラインサービスの不具合にも一貫した対応・アクセスができない状況でも混雑時を予測して生徒・教員が自主的に回避)」「家庭の協力(環境のない生徒には対応の予定であったが必要なかった)」であったことが示された。

最後に、武沢護氏より、高等学校と大学学部、大学院の授業の観点からの発表があった。発達段階にある初等中等教育においては、多忙な教員が、いかに手軽に授業を作成できるか、また、不安の中にいる生徒たちに対して、いかにして授業の質を保つかについて工夫した点が紹介された。高校生は大学生と違い、集中力がないので、15分のコンテンツを見せるのが大変であったが、毎日課題を出すなど工夫によっては大学生に比べて、オンライン授業への親和性がある。また、すばやく課題ができる生徒と何度もビデオを見る生徒どちらの生徒にとっても一定の効果があったことが紹介された。オンライン授業が一段落した現在、蓄積したコンテンツをモジュール化することと、オンライン授業でいかにインタラクティブにするかを整理し直しているところであり、オンライン授業の中での気づき(従来の学校の考え方が崩れていく、教員はいらないのか? 様々な特性を持った子供たちにどう対応するのか、教職課程こそいろいろ考えた仕掛けを提案する必要性があるなど)をいかに今後につなげていくかという視点から「Open Education と Open Educational Resources」「授業方法の多様化の可能性」「教員養成課程の見直し」といった今後の課題が示された。

後半では、3人の方の発表をもとに、質疑応答や意見交換が行われた。オンライン授業における生徒の環境による問題点はなかったか、動画コンテンツを使用するときの著作権について、コロナ禍で教育がどのように変化したか、対面授業になり、ICT化促進を元に戻そうという動きはないか、などについて意見が交わされた。最後に、「今後コロナが終わった後どのようにICTを利用していくのか?」という問いに対し、ICTの良さ・対面の良さを多くの教員が実感した今だからこそ変えていけることがあるという意見と共に、20年後30年後の教育の質が大きく変化していく中での教員のありようについて考えさせられる発言もあった。2月まで誰も想像していなかった事態に直面し、突然のオンライン授業導入となりすべての条件を完全に整えることができない中でも、何とか臨時休校を乗り越えてきた経験に基づく貴重な意見交換となった。

文責：柴田直美(CIEC 小中高部会・日本女子大学附属高等学校)

